

オペラ・バレ「愛の神アムールの旅 *Les Voyages de l'Amour*」 (1736) 考察及び試訳

ジョゼフ・ボダン・ド・ボワモルティエ Joseph Bodin de Boismortier 作曲

シャルル・アントワヌ・ル・クレール・ド・ラ・ブリュエール

Charles Antoine Le Clerc de La Bruère 台本

石川弓子

はじめに

1673年 J.B. リュリ⁽¹⁾の音楽悲劇トラジェディ・アン・ミュージック *Tragédie en musique*⁽²⁾「カドミュスとヘルミオーヌ *Cadmus et Hermione*」によってフランスにおけるオペラというジャンルが確立された。約25年後、トラジェディ・アン・ミュージックとは別の新たな構成内容を持つオペラ・バレ *Opéra-ballet* の誕生を見ることになる。しかし誕生以来、台本、楽譜にはこれらの作品に対してオペラ・バレという名称は全く使用されず、バレ *Ballet*⁽³⁾ というジャンル名が冠されていた。

この小論では17世紀末から18世紀後半までに渡るオペラ・バレの歴史で最も数多く創作された1736年に属する「愛の神アムールの旅」を考察し、台本試訳をする。

1 オペラ・バレの定義及び名称

オペラ・バレはどのような特徴を持ち、その名称はいつ頃から現れたのだろうか。18世紀の証言をいくつか引用しよう。

「ロワ⁽⁴⁾は「恩寵 *Les Grâces*」という題のオペラ・バレを書き、ムレ氏⁽⁵⁾がその音楽を作曲した[…]⁽⁶⁾ (1735年3月31日特任官僚デュビュイソンがコーモン侯爵に宛てた書簡)

「私自身で公表するつもりであったオペラ・バレ的一幕を貴方にお送りします。」⁽⁷⁾
(1738年3月15日某氏の書簡)

「我々の詩人たちは、その後、バレを考案した。その各幕 *Entrée* は完結した筋を持っている。「優雅なヨーロッパ *L'Europe Galante*」⁽⁸⁾はこのジャンルの完璧なモデルである。」⁽⁹⁾ (1741年 G.-B. マブリ)

「バレは3つないし4つの短い幕で構成される。各幕は生き生きとして軽妙な筋を含むべきで、望め

ば少しギャラントな筋を入れても良い。全てに、つまり各幕に軽い山場が求められる。」⁽¹⁰⁾

(1741年 レモン・ド・サン・マール)

「「優雅なヨーロッパ」は音楽劇として今日受け入れられている形態の最初のバレである。このジャンルはまさにフランスに属するもので、イタリアには似たようなジャンルは全くない。[…]

3ないし4幕 *Entrée* 構成で、それにプロローグが先行する。プロローグと各アントレは歌と踊りの混じった1つか2つのディヴェルティスマンを含む。」

「叙情悲劇には踊りと歌によるディヴェルティスマンが必ずあり、筋の本質がそれを導く。バレはそれ自体が踊りと歌のディヴェルティスマンということであり、それが筋を担う。」⁽¹¹⁾

(1751年『百科全書』の項目「Ballet」)

「ド・ラ・モット氏が創始者のオペラ・バレ[…。]。新たなバレの最初の作品は「優雅なヨーロッパ」である。このジャンルはまさにフランス特有のものであり、イタリアには似たようなものは全くない。

ほとんど疲れない筋、雅な祭りが軽快なテンポで続き、歌と踊りの心地よい混じり合い、途絶えることなき多様さ、これこそオペラ・バレの利点であり、同時にそれがフランスで生まれ、存在し続けている理由なのであろう⁽¹²⁾。

(1753年 P. エステーヴ)

「ラモットによって考え出されたスペクタクルは歌と踊りのディヴェルティスマンが混じりあった、それぞれが独自の筋を持つ異なる数幕で構成されている。それらは洒落たヴァトー、魅力ある細密画であり、デッサンの精密さ、筆致の優美さ、色彩の輝きを要求する。

「優雅なヨーロッパ」はキノー⁽¹³⁾のオペラと全く似ても似つかない我々の最初の音楽作品である。これはまさにフランスのジャンルである。ギリシア人、ローマ人はこのアイデアでのいかなるスペクタクルも持っていなかった。キノーの作品の中で、幾つかのエピソード的な祭りが私の印象に残っているが、多分ラモットにこのアイデアを提供したのだらう。」⁽¹⁴⁾ (1754年に L. de カユザック)

「総括する題によってのみ幾つかの小詩がまとめられ作曲されたオペラ・バレが今もって劇場にかけられている。ド・ラモット氏が創始者であり[…。]」⁽¹⁵⁾

(1758年 J. ラコンブ)

「バレは、フランスにおいて風変わりなオペラのジャンルにつけられた名称で、そこでは踊りが他の作品よりふさわしく挿入されているわけでもないし、より効果的でもない。これらのバレの大多数で、幕数と同数の異なった主題を持ち、筋には関係のない曖昧ななんらかの共通点のみでお互いが結びつけられており、台本作家がプロローグでその予告を配慮しなければ、観衆は全く気がつかないであらう。」⁽¹⁶⁾

(1768年 J.-J. ルソー『音楽辞典』の項目「Ballet」中)

「オペラ・バレの主題については、お互いに何の関係もない幾つかの幕で構成されている、つまり同じ表題のもとに集められ、どれも切り離された作品であることを指摘しよう。」⁽¹⁷⁾

(1769年 P.-J.-B. ヌガレ)

「我々の舞台音楽芸術において新たなジャンルが必要であった。ラ・モットはオペラ・バレを考案し、「優雅なヨーロッパ」で例を示した。」⁽¹⁸⁾

(1769年 N. プリケール・ド・ラ・ディムリ)

「オペラ・バレ、すなわち各幕の筋は連続していないが、諸感覚や諸元素のような集合的な概念のもとに統合されたスペクタクルが考案されて以来、そのプロローグは共通の表題を担っている。」⁽¹⁹⁾

(1787年 J.-F. マルモンテルの項目「Prologue」中)

オペラ・バレの名称を使用する記述は台本、楽譜とも見られず、オペラ・バレの最初の例として引用される「優雅なヨーロッパ」の創作時、1697年の『メルキユール・ギャラン』においても見られない。誕生約40年後になる1735年の資料、出版個人書簡の中に用いられたのが初期の例であろう。しかし1741年のレモン・ド・サン・マールとG.-B. マブリ、1751年の『百科全書』の項目「Ballet」は明らかにオペラ・バレの特徴を持つ作品をオペラ・バレという用語は使わずに説明している。⁽²⁰⁾ オペラ・バレの盛衰が1695年から1773年と考えると⁽²¹⁾、1769年はすでにこのジャンルの衰退に近い年代で、1787年のマルモンテルの記述はこのジャンルがすでに過去のものとなってからの回顧である。

以上の記述及びオペラ・バレと見なされる作品の検討から、その特徴を挙げよう。

◇ 各幕は独自の題名を持ち、独自の筋。登場人物、舞台設定は全く異なる。つまり同じ名前の登場人物により筋が運ばれない。

◇ 作品の題名は各幕のテーマを総括する。分野を問わず題名はもちろんこの役割を持つのは当然である。

◇ プロローグあり、或いはなしの数幕(2幕-5幕)構成で、プロローグがある場合はその中に後続する幕の予告が直接、間接にされている。

◇ 各幕の名称としてほとんどアントレ *Entrée* が用いられるが、稀な例外として、*Acte*、*Leçon*、*Ballet* が見られる。

◇ 舞曲、踊りが作品中で大きな比重を持つ。

◇ 17世紀末から18世紀後半にかけてフランス特有のジャンルである。

2 〈バレ ballet〉と〈英雄バレ ballet héroïque〉の違い

オペラ・バレに相当する作品群の台本には数例を除いて、創作者側からはバレと英雄バレの2つのジャンル名称しか使われていない。これらの違いはどこにあるのだろうか。1928年にP.-M. マソンは英雄バレについてこのように定義している。「この〈英雄的〉な性格とは、オペラ・バレでもパストラルにおけるように、神、守護神、伝説上の人物、時として歴史上の人物のような〈英雄〉の存在によって顕示される。しかし、古典悲劇の出来事を思い起こすような、何かすごい波乱万丈を含んでいれば、その筋からも英雄的と言える」⁽²²⁾と述べている。そしてマソンは英雄バレの最初の作品をオペラ・バレ「ギリシアとローマの祭典 *Les Festes Grecques et Romaines*」⁽²³⁾ (1723) としている。

なおマソンは英雄バレには作品全体が一つの筋を持つものと各幕独立した筋を持つものと2種類あると指摘し、〈英雄オペラ・バレ *opéra-ballet héroïque*〉の用語を提唱する。⁽²⁴⁾

バレについても同様にこの2種類の存在が指摘できる。

3 オペラ・バレの盛衰

17世紀後半から18世紀後半にかけてのオペラ台本から、オペラ・バレと呼ばれるジャンルの作品は1695年から1773年まで見られ、3期に分類できる。⁽²⁵⁾

第1期 1695～1723年 例外はあるが通常 Prologue と Épilogue で各幕を囲む作品が見られる。

第2期 1723～1750年 例外はあるが通常 Épilogue が見られなくなる。英雄バレの出現

第3期 1750～1773年 Prologue が見られなくなる。

18世紀の何人もの作家たちは1697年の「優雅なヨーロッパ」をオペラ・バレの最初の例と言い切っている。しかしアルジャンソンは1695年「四季のバレ *Le Ballet des Saisons*」について「それは、各幕 *Entrée* が独自のちょっとした筋を含む4段に分かれた初期のバレの一作で、「諸元素 *Les Elémens*」、*「ヨーロッパの国々 Nations d'Europe*」とその後の一連の見事な模倣が続く。」⁽²⁶⁾と言及している。その台本の検討から、確かにオペラ・バレの条件を満たしていると判断し、このジャンルに含めた。

オペラ・バレ全史を見ると、全く上演されない年、1作品のみの年、2作品上演の年が多く見られるのに比べ、1736年は一挙に4作品上演された多産な年になる。

4 «愛の神アムールの旅»について

4-1 台本作家シャルル・アントワーヌ・ル・クレール・ド・ラ・ブリュエールと作曲家ジョゼフ・ボダン・ド・ボワモルティエ

ラ・ブリュエールは1716年⁽²⁷⁾ オワーズ県クレピ-アン-ヴァロワ Crépy-en-Valois で生まれ、1749年ローマ在フランス大使に任命されたニヴェルネ公の第一秘書官として共にローマへ赴いた。しかし天然痘を患い1754年9月18日若くしてその地で客死した⁽²⁸⁾。音楽劇の台本作家としては、1736年オペラ・バレ«愛の神アムールの旅»、1739年音楽悲劇«ダルダニユス *Dardanus*» (音楽 J.-Ph. ラモー⁽²⁹⁾)、1747年音楽悲劇«ペルセ *Persée*»の新たなプロローグ (音楽 J.-B. リュリ)、1748年一幕物バレ«エリゴヌ *Erigone*» (音楽 J.-J. C. de モンドンヴィル⁽³⁰⁾)、1749年英雄バレ«ノワジー公 *Le Prince de Noisy*» (音楽 F. ルベル & F. フランクール⁽³¹⁾)、1752年音楽悲劇«リニユス *Linus*» (音楽 J.-Ph. ラモー)がある。没後の1758年オペラ・バレ«パフォスの祭典 *Les Fêtes de Paphos*»の第2幕に«エリゴヌ»が組み込まれた。

同時代の評価を見てみよう。

「弱冠20歳のパリの家柄の良い若者が、去年私に彼の書いたいつかの韻文を見せてくれました。私を魅了する素質、特に叙情的な語調をそこに見出し、オペラの台本を書くことを勧めたのです。彼の試みは、私に言わせると、キノーの後継者という期待をも生む大家の片鱗があります。彼のバレの題名は«愛の神アムールの旅»で、ボワモルティエが音楽を付けました。」⁽³²⁾ (1736年3月14日)

「ラ・ブリュエール氏のオペラ台本は優雅さ、機知に富んでいると思います。この詩人と同様魅力的な音楽家を彼のために期待します。」⁽³³⁾ (1736年4月5日ヴォルテール書簡)

「光栄にも貴方に申し上げますと、詩人で、私が大変気に入っており、キノーの足跡を辿るのではないかという弱冠20歳の若者ですが…」⁽³⁴⁾ (1736年5月5日)

「感じよく礼儀正しい彼の性格、加えて文芸に恵まれた才能によって、何人もの有徳な友人たちと著名な庇護者に恵まれた。」⁽³⁵⁾ (1763年A. レリス)

どの意見もラ・ブリュエールの叙情的な韻文や才能を手放しに誉めている。

ボワモルティエはロレーヌ地方のティオンヴィル Thionville で1689年12月23日に生まれ、1755年10月28日セヌ・エ・マルヌ県ロワシ・アン・ブリ Roissy-en-Brie で生涯を閉じた。器楽曲を多く作曲した作曲家として知られるが、劇音楽も作曲している。1736年のバレ«愛の神アムールの旅»

は最初の劇作品である。その後 1743 年にバレ「ドン・キホーテ *Don Quichotte*」(台本 Ch. -S ファーバール)⁽³⁶⁾、1747 年にパストラル「ダフニスとクロエ *Daphnis et Chloé*」(台本 P. ロジヨン)⁽³⁷⁾、1748 年バレ「ダフネ *Daphné*」(台本ピニエ)⁽³⁸⁾ と 1752 年に「世界の四部分 *Les Quatre Partis du Monde*」(台本 P. -Ch ロワ)⁽³⁹⁾ を作曲し、1753 年ごろには音楽活動からは身を引いたようだ。

やはり同時代の評価に注目して見てみよう。

「多産家のボワモルティエ氏は、作曲家リストの中に占める位置は見過ごせない。もし彼が作品の一部のみ出版する慎重さを持っていたのなら、彼の名声は完璧であったろう。しかし何と言われようと、彼は軽妙で魅力ある曲を作曲し、彼のオペラ「ダフニスとクロエ」は好評であった。劇詩がこのパストラルの成功にかなり貢献したのは確かだ。それに公にしたものは全て即座に売れた。時宜を得て売れたのだ。人々はフルートとミュゼットの非常に洒落た効果を生む心地よい戯れに飢えていた。彼は目下の流行で得をし、自分の才能を二倍利用したのである。」⁽⁴⁰⁾

(1754 年ダカン・ド・シャトー＝リヨン)

「それら[ボワモルティエの作品]は忘れられて久しいとはいえ、この見捨てられた鉱山を掘り起こすことに身を捧げたいという人は、金塊を作るのに十分なほどの砂金をそこに発見することになるだろう。」⁽⁴¹⁾

(1780 年ラ・ボルド)

ボワモルティエ没後 25 年目にラ・ボルドは彼に素晴らしい賛辞を向けている。

ラ・ブリュエール 20 歳、ボワモルティエ 47 歳の時、2 人にとりそれぞれ初めてのオペラ作品「愛の神アムールの旅」が生まれた。2 人の間には親子ほどの年齢差があるが、彼らの出会いはどのようなか、どのような協力関係でこの作品が完成されたのだろうか。詳しい状況は知られていない。

4-2 作品の上演

「愛の神アムールの旅」の上演は楽譜表紙には 1736 年 4 月 26 日と印刷されているが、実際は『メルキユール・ド・フランス』の言及のように、王立音楽アカデミー *Académie Royale de Musique* での初演は 1736 年 5 月 3 日、最終日は 6 月 12 日である。しかし第 2 幕「町」が好評ではなかったので 6 月 4 日からは新たな第 2 幕を演奏したとある。このように即座に対応できる能力があるのはひとえに作家たちの豊饒な産出力によるものだとしている。総計 18 回上演された。⁽⁴²⁾ また 1738 年には王妃のコンサートで 1 回上演されている。⁽⁴³⁾

なお 1736 年 5 月 3 日の日付き出版台本小冊子には第 3 幕「宮廷」について登場人物も筋も異なった 2 番目の版が載せられているが、誰が演奏したのか主演者情報はなく、楽譜も残されていないので実際に演奏されたのか不明である。

4-3 作品についての評価

上演直前リハーサル、直後の評判はどうだったのでしょうか。

「昨日、公の邸宅でこの作品の稽古が行われ、皆、劇詩に魅了されましたが、音楽にはまあまあ満足でした。私はこの若い作家を真に驚くべき人物と考え、グレッセ⁽⁴⁴⁾の場合よりもさらにずっと評価します。この作品全体には機知とセンスが溢れています。」⁽⁴⁵⁾ (1736年3月14日付書簡)

「今月3日木曜日、アカデミー・ロワイヤル・ド・ミュージックにてプロローグと4幕構成のバレ「愛の神アムールの旅」が上演され、聴衆は大変好意的に受け止めた。劇詩はド・ラ・ブリュエール氏、音楽はボワモルティエ氏である。」⁽⁴⁶⁾ (1736年5月『メルキュール・ド・フランス』)

この記事の終わりの方では、

「この幕[帰還]は作品の中で一番注目され、あまねく拍手喝采を受けた。その他については、皆は作詩法の美しさを誉めた。真の玄人たちはオペラ劇場で聞いた中で最も叙情的な詩だという。とても魅力ある韻文にもう少し活発な筋があったら、音楽ももっと生き生きとなり、もっと変化に富んだかもしれない、と彼らは望んだようだ。

とはいえ、このバレは申し分なく上演された。」⁽⁴⁷⁾ (1736年5月『メルキュール・ド・フランス』)

「オペラ劇場は昨日「愛の神アムールの旅」プロローグ付き4幕のバレを初めて上演した。劇詩はラ・ブリュエール氏、音楽はボワモルティエ氏である。しかし後者が前者と組んだのはなんと残念なことか！もしラ・ブリュエール氏が音楽家としてラモーと組んでいたのなら、多分「愛の神アムールの旅」は我々のバレの中で一番魅力のあるものになっていたであろう。」⁽⁴⁸⁾

(1736年5月4日デュビュイソン)

「作品は私が予想し、カリニャン公邸宅で聞いた稽古について貴方に申し上げた運命を辿りました。私は自分の愛着が聴衆の喜びと同じであることを確認するうれしさで有頂天になったのです。オペラの詩が、かつて、「愛の神アムールの旅」ほど拍手喝采を受けたことはなかったし、音楽が概してこれほど無視されたことはありませんでした。けれども私はこの詩人の栄光にしか興味がなかったので、音楽家の不面目を静観しました。」⁽⁴⁹⁾ (1736年5月5日付書簡)

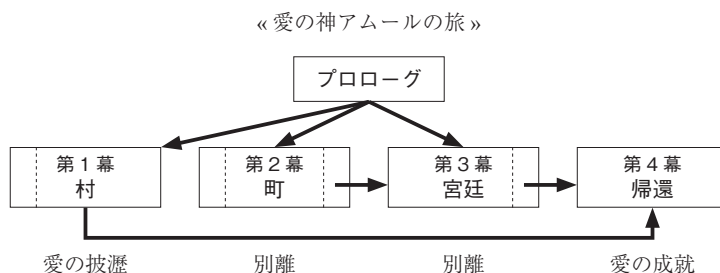
「これは、すべてのアントレとプロローグが、疑問の余地はあるとはいえ、一つの全体あるいは一つの筋になっている唯一のバレだ。それゆえ、溢れる創意工夫、ギャランな側面、道徳的なことも加わり、聴衆は満足した。劇詩は抒情的で、凡庸さや非常識から解放されており、これは滅多にないことだ。とにかく聴衆は事前に十分情報を得ており、新たな創作者たちに拍手喝采をしようとした。

快いメロディー、快いハーモニーがなくはないということは否定できないが、ヴァイオリンのメロディーは質が低く、アリエットには修飾音がなく、レシタティフは平凡である。」⁽⁵⁰⁾

(アルジャンソンによる言及)

『メルキュール・ド・フランス』の立場は、中立的といえるが、他の個人評は作曲家ボワモルティエにはかなり厳しい意見となっている。

4-4 「愛の神アムールの旅」の構



この作品について、プロローグに各幕の予告として「村落 *les Hameaux*」(第1幕の題は「村 *le Village*」である)、「町 *la Ville*」「宮廷 *la Cour*」が見られる。各幕は独立した主題を持ち、各幕で筋を担う登場人物は異なる。オペラ・バレ史第2期に属しているとはいえ第1期に見られるエピローグの役割を担う第4幕の存在がある。また第1幕、第2幕の初めにはちょっとした導入部分があり、第2幕、第3幕の終わりには次に赴く理由や場所の予告を持つ。第1幕の解決はエピローグとして第4幕に持ち越され、各幕の繋がりがさらに強められている。このことにより、アルジャンソン侯爵が指摘しているように、オペラ全体が緩く一つにまとめられているとも考えられ、オペラ・バレではあるが一貫した筋の作品へ一歩近づいている。各幕独自の主題を持つとはいえ、全体の有機的繋がりも感じられ、オペラ構成としては珍しい作品である。各幕の名称もこの作品に関しては、作品全体の筋が一貫しているオペラの幕に用いられる「アクト *Acte*」が使われている。ラ・ブリュエールのこの点に関する意図についての記述はないものの、理由も頷けなくはない。

5 日本語試訳

訳出に用いた台本小冊子は1736年5月3日の日付のある初演版である。⁽⁵¹⁾ その中には第3幕「宮

廷」の第2版も印刷されているが、本論では訳出はしていない。また上述した1736年6月4日以降上演の第2幕「町」第2版は当該小冊子には含まれていないので訳出していない。なお台本試訳は補遺1に示した。

おわりに

本論で取り上げた「愛の神アムールの旅」について幾つかの観点から独創性が指摘できる。台本構成は、第1幕から第3幕までは登場人物の違う独自の筋を持っているが、第4幕は第1幕の続きで作品をしめくくるエピローグである。そして第2幕、第3幕、第4幕を繋ぎ止める蝶番によって一貫した筋のオペラを思わせる要素を持つ。また本論では扱わなかったが序曲について、リュリ以来のフランスのオペラの特徴であるフランス風序曲、2拍子の荘厳な第1部、3拍子の小規模なフガートを含む軽快な第2部、再び第1部を演奏し終わるといった典型的な様式とは少し違い、各部分の曲想や特徴は残しているものの、3拍子の第1部、2/4拍子の第2部、6/4拍子の第3部という音楽構成になっている。オペラ・バレ史ほぼ中頃の最盛期に位置するこの作品は、いくつかの視点から斬新な作品をとらえていることを強調したい。

注

- (1) Jean-Baptiste Lully, (1632-1687) イタリア出身フランスの作曲家、ルイ14世治下権力をふるった。
- (2) この用語以外にも *tragédie mise en musique*, *tragédie lyrique* が使用されている。
- (3) なお Ballet は時代によりその含まれる内容が違う。18世紀後半以降の Ballet とは全くその内容が違うので混同してはいけない。
- (4) Pierre-Charles Roy, (1683-1764)
- (5) Jean-Joseph Mouret, (1682-1738)
- (6) Simon-Henri Dubuisson, *Lettre du commissaire Dubuisson au Marquis de Caumont*. 1735-1741, p.47.
- (7) *Nouveaux amusements du cœur et de l'esprit*, Tome 1, Brochure 5. 1737. p.289-29. 印刷年と書簡日付に疑問あり。
- (8) *L'Europe Galante*, 1697, 台本 : Antoine Houdar de La Motte, 音楽 : André Campra
- (9) Gabrile-Bonnot Mably, *Lettre à Madame la Marquise de P*** sur l'opéra*, 1741, p.127.
- (10) Toussaint de Rémond de Saint-Mard, *Réflexion sur l'opéra*. 1741 p.83-84.
- (11) *Encyclopédie*, Tome II, 1751 「Ballet」
- (12) Pierre Estève, *L'esprit des beaux arts*, Tome 2, 1753, p.35-36.
- (13) Philippe Quinault, (1635-1688).
- (14) Louis de Cahusac, *La danse ancienne et moderne*, 1754, p.108-109 puis 110.
- (15) Jacques Lacombe *Le spectacle des beaux arts*, 1758. 第XI章 *poèmes lyriques* セクション IV Opéra-ballet. p.161-165.

- (16) Jean-Jacques Rousseau *Dictionnaire de musique*, 1768. 「Ballet」
- (17) Pierre-Jean-Baptiste Nougaret, *De l'art du théâtre*, p. 230-231.
- (18) Nicolas Bricaire de La Dixmerie, *Les deux âges du goût et du génie français sous Louis XV*, 239 p.
- (19) Jean-François Marmontel, *Elemens de littérature*, 1787, dans ses *Œuvres complètes*, Nouvelle édition, 1819, 「Prologue」
- (20) オペラ・バレの特徴に言及したものが⁸17世紀末から18世紀初めにかけて私の検討した書籍には見つからなかったが、引き続きの研究が必要である。
- (21) Maruyama-Ishikawa Yumiko, *L'opéra-ballet des Indes Galantes (1735) aux Fêtes d'Hébé (1739)*, Thèse soutenue à l'Université -Paris 4, 1995, 第II, III, IV章参照。
- (22) Paul-Marie Masson, « Le ballet héroïque », *La revue musicale*, 9e année, no.9, 1er juin 1928, p.134 .
- (23) *Les Festes Grecques et Romaines*, 1723, 台本 : Louis Fuzelier, 音楽 : François Colin de Blamont
- (24) Paul-Marie Masson は前掲書の中で述べている。
- (25) 補遺2の表参照。
- (26) René Louis de Voyer d'Argenson, « Note sur les œuvres de théâtre », (ms 3452, f. 72) *Study on Voltaire and the 18th Century*, vol. 43. II, 1966, p. 470. アルジャンソンの生没年は1694-1757。「ヨーロッパの国々 Nations d'Europe」は、「優雅なヨーロッパ」のことである。
- (27) *Nouvelle Biographie Générale depuis les temps les plus reculés jusqu'à nos jours*. Tome 30, 1859. では1714年、1715年又は1716年という記述もあるが、BNF Gallicaのカタログでは1716年を採用。
- (28) Antoine Lérès, *Dictionnaire portatif historique et littéraire des theatres*, 1763. 「La Bruère」
- (29) Jean-Philippe Rameau, (1683-1764)
- (30) Jean-Joseph Cassanéa de Mondonville, (1711-1772)
- (31) François Rebel, (1701-1775), François Francœur, (1711-1702), 2人は共同で音楽作品を多く生み出した。
- (32) Edouard de Barthélemy, *Nouvelle de la Cour et de la ville [...] 1734-1738*. 1879, p.74.
- (33) *Œuvres complètes de Voltaire*, Nouvelle édition, Correspondance II (Année 1736-1738., Nos 540-937), 1880. p.68.
- (34) *Nouvelle à la main en 1733 à 1739*, f.165v.
- (35) Antoine Lérès, 1763, *Ibid.* Article 「La Bruère」
- (36) Charles-Simon Favart, (1710-1792)
- (37) Pierre Laujon, (1727-1811)
- (38) Stéphan Perreau *Joseph Bodin de Boismortier 1689-1755*, 2001, p 197, 台本 Pigné, 未上演という以外詳細は不明。
- (39) Stéphan Perreau, 前掲書, p 197, 台本 Pierre-Charles Roy, 未上演という以外詳細は不明。
- (40) Pierre-Louis D'Aquin de Château-Lyon, *Siècle littéraire de Louis XV ou Lettre sur les hommes célèbres*, 1754. 1ère partie, p.49.

- (41) Jean-Benjamin de La Borde, *Essai sur la musique ancienne et moderne*, 1780. Tome III, livre V, p.393.
- (42) *Mercure de France*, mai 1736, p.1443 et 1447.
- (43) Maruyama-Ishikawa Yumiko, *Ibid.* p.163.
- (44) Jean-Baptiste-Louis Gresset, (1709-1777) フランスの詩人、劇作家。
- (45) *Nouvelle à la main en 1733 à 1739*. f 68r-v.
- (46) *Mercure de France*, mai 1736, p. 976-977.
- (47) *Mercure de France*, mai 1736, p. 986.
- (48) Simon-Henri Dubuisson, *Lettre du commissaire Dubuisson au Marquis de Caumont*. 1735-1741, Dans la lettre IV du 4 mai 1736, p.208.
- (49) *Nouvelle à la main en 1733 à 1739*. f.165 v.
- (50) René Louis de Voyer d' Argenson, *Note sur les œuvres de théâtre*, f. 283, II, p. 530.
- (51) Charles-Antoine Le Clerc de La Bruère, *Les voyages de l'amour*, ballet (Éd.1736), hachette Livre, BnFGallica, Bibliothèque numérique. <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k71615b>.

補遺 1

愛の神アムールの旅

プロローグ

(踊る)

(舞台はシテール島にある愛の神アムールの庭園。アムールが花々の上に横たわり、かたわらにグラス(優美)たちと逸楽の神ヴォリュプテがいる。)

西風の神ゼフィール

美しき双眼が勝利を確実にする貴女がた、
誇り高き美しさ、今度は貴女がたが愛す番です。
貴女がたの魅力はアムールの賜物だとお考えください。

彼の栄光のために用いるべきです。

第一場

(愛の神アムール、西風の神ゼフィール、それぞれの従者、シテール島住人たち)

美しい双眼が、等

合唱

(踊る)

勝利せよ、アムール、我々の望みを叶えよ、
放て、魅力に溢れた多くの矢を我々に放て。
お前の武器の力を示せば示すほど
我々の心は幸せになるだろう。

愛の神アムール

歌え、この上なく妙なる楽の音をいつも聞かせておくれ、
心地よい響きが我が心まで届くのが感じられる。

愛の神アムールの従者

あなたがたはすごい女たちに尽くし、
ついには女たちがあなたがたの望みに応えてくれると分かるでしょう。
恋の苦悩はいつしかありません。
アムールは苦悩を終わりにし、
喜びは終わらせません。

そして、それに耳を傾ける喜びで

あなたがたに及ぼす十分な善の見返りを受ける。

西風の神ゼフィール

神々と人間たちは、あなたの威力のおかげで幸せであり、
あなたの魅力ある掟のもと、多くの甘美さを見つけてます。

西風の神ゼフィール

(合唱と交互に)
全てが魅了されるように、
シテール島の神の魅力で。
喜ばれるのにどんな資格も持っていないと？
彼は美の寵児です。
彼は心地よい喜びの父なのです。

なぜ、あなたはいつも冷淡な悲しさに従い、
あなたの溢れる思いやりが天地万物に授ける
この恩恵を拒否するのですか？

ご自分の矢で傷つけてください、あなたの番です。

通い合う情熱の喜びを体験してください。

愛の神アムール

愛すなら、永遠の絆を私は望む。

全てが魅了されるように、 等

しかし、どうやって忠実な見返りが得られようか。

勝利の確かな矢によって、
高慢な女の厳格さを和らげることはできる。
けれども私が心を捧げたら、私の威力は終わっ
てしまう。

そして、我が栄光のためにはあらゆることがで
きるのに
我が幸福のためには何もできない。

西風の神ゼフィール

そんな無駄な危惧は遠ざけてください、
あなたには矢など必要ではありません。
最もつれない女性の心を動かすのに、
あなたの魅力で十分です。
いかなる女もあなたの思いになびかないことが
あるでしょうか。

この地を離れましょう、出発しましょう、勝利
の女神ヴィクトワールがあなたを呼んでいる。
村落を、町を、宮廷を巡りましょう。
おそらく、そこでアムールを繋ぎ止めるに相応
しい

忠実な心を見つけれられるでしょう。

愛の神アムールと西風の神ゼフィール

出発しよう、シテール島を離れよう。
急ごう、延ばす理由は何もない。
我々の願いを実現する出発の時。
愛の計画を遅らせるべきものは何もない。
そして、最も大切なことは
幸せになろうと考えることなのだ。

(愛の神アムールは西風の神ゼフィールと一緒に
出発する。)

合唱

出発せよ、勝利を目指し飛翔せよ。
さあ、あらゆる心を服従させよ。
魅力ある勝利者たちよ、励めよ、
お前たちの喜びと栄光のために。

プロローグの終わり

第1幕 村

(舞台は草原を示す。)

第一場

(シルヴァンドルの名のもと羊飼いに扮する愛
の神アムール。西風の神ゼフィールも羊飼いに
扮する。)

愛の神アムール

何とこの場所が気に入ったことか！
自然は勝り、魅力的な安らぎの場は、
アムールにさらに心を捧げることしか
心にいっそう穏やかな運命をもたらさないだろ
う。

ああ！この閑居の地は何と美しいことか、
そして羊飼いたちは何と幸せなことか！
彼らは私の恋の炎を受け入れることしかな
い。

彼らの喜びは恋すること、
そして彼らの美德は忠実であることなのだ。

西風の神ゼフィール

あなたは、彼らを喜ばせ、それを分かち合うの
ですか？
あなた自身の新たな恋の炎のことは何も話して
くれません。

えっ何ですって！羊飼いの服装で、
アムールはつれない女を見つけられたかもしれ
ないと？

愛の神アムール

私の優しい願いに、ダフネは反抗的ではない、
私こそ彼女を乗り気にさせることができた。
彼女は不安に駆られて、驚いて、自信なく、
深く関わることを心配している。
そして、彼女の心は、あえてささやきあおうと
しないのだ。

彼女は自分の心をつらえている気持ちを責めな

いよう、
知らないふりをしている。

西風の神ゼフィール

誘惑の神よ、あなたの苦悩にも関わらず、
あなたは我々を支配下に置けるのです。
絆をさらにしっかりと引き締めるが、それをあまり感じさせない。
そして人々はまさにあなたの鎖の中で悶々とすることに気づきますが、
もはや手遅れでそこから逃れたいという時ではないのです。

誘惑の神よ、あなたの苦悩にも関わらず、 等

愛の神アムール

ダフネは祭りの前にこの地に来るはずだ。
私にそう約束した。ああ！何という喜びになるだろう、
彼女の恋の炎を私に告白するよう仕向けられれば！

自分が幸せだと信じるのは大したことではない。

しかし、愛する人の口から
情熱を確実に勝ち取れば、
至高の喜びだ。

西風の神ゼフィール

ダフネがこの日、あなたの言うことに耳を傾けるなら、
あなたは彼女に告白させられるでしょう。
人々がアムールを聞き入れることを承知するなら
アムールに応える心構えは十分あるのです。

愛の神アムール

確かに、私はこの上なき優しい報いの心を待っている。

西風の神ゼフィール

けれども、この愛しい人の心を捉えるには十分ではありません。

あなたはいつも恋の勝利者でしょうか？

たやすく心を服従させますが

忠実にさせるのは、さらに容易ではありません。

愛の神アムール

まもなくこの地を離れて、私は試そう、

彼女の忠実さがどこまで続くか。

我々は町を、宮廷を巡らなければならない、
私のいない間、どのような結果をもたらすか、
様子を見よう。

おや、彼女が見える。愛のほとばしりを語るときだ。

幸せなひとときとなれ。

ああ！私は彼女を何と愛していることか！彼女は
何と美しいのか！

ゼフィール、彼女と話をさせてくれ。

第二場

(シルヴァンドルの名のもと羊飼いに扮する愛の神アムール、ダフネ)

シルヴァンドル

この日、キプロスの女神により褒美が提案された、

最も妙なる声で

女神の息子の魅力が歌える羊飼いに。

勝利者はその褒美を貴女の手から受け取るはずだ。

ダフネ、それを得るために、私は全てのことを
試みよう。

恋に落ちたシルヴァンドルのために、祈ってくれるか。

ダフネ

勝利者である羊飼いの

頭上に私の手で栄冠を与える…

シルヴァンドル

褒美が貴女の心なら、
この祭典の褒美を何としても得たいものだ！
貴女は我々の競技の勝利者に栄冠を被せる。
これほど魅力ある手とその栄光をさらに飾るよ
うに！
ああ、もし貴女の美しい瞳の輝きを歌うのなら、
私が勝利を得るのは確かなのだが。

ダフネ

羊飼いさん、無駄なおしゃべりをやめてくださ
い。
あなたの恋の炎についてずっとお話ししたいの
ですか？

シルヴァンドル

なぜならいつも私の心には恋の炎が満ちてい
て、
私の心にみなぎる唯一の感情だからなのです。
貴女は全く返事をしてくれない、視線を逸らし
て…
貴女をそんなに美しくしている瞳で私を見てく
ださい。
貴女は冷酷な自尊心と張り合うのですか、
私の優しい恋の炎が極端だとして？
私をこれほど優しく、これほど忠実にする貴女
の瞳、
その変わらぬ無関心さで
私を不幸にするのですか？

ダフネ

絶えず愚痴をおっしゃっているんですね！
アムールが私たちを捕らえているときは、
それゆえ、恋の苦悩が生まれますね？

シルヴァンドル

アムールが私たちをつれないその女（ひと）の
そばに繋ぎ止めるとき、
恋する甘美な喜びに、幾らかの心痛を混ぜます。

けれども、我々の望むその女が
その絆をお互いに分かち合うとき、
アムールはもはや喜びしかありません。

ダフネ

アムールは私たちをひどく不安にし、
アムールに心を許してしまうのは危険だとい
うことを聞きました。

シルヴァンドル

アムールを勝利者にしてください、
そうすれば、アムールの魅力について評価でき
るでしょう。

ダフネ

アムールに心を許してしまうのは危険すぎま
す。

一緒に

ダフネ

心安らかな無関心さだけが
私たちに幸せな日々を与えてくれます。
愛が始まるや否や

アムールはその足取りに移り気を導き、
喜びは永遠に飛び立っていきます。

シルヴァンドル

退屈な無関心さは
私たちに幸せな日々を与えてくれません。
愛が始まるや否や

アムールはその足取りに希望を導き、
苦しみは永遠に飛び立っていきます。

シルヴァンドル

いいや、アムールは全然恐ろしくなどありませ
ん。
私たちを幸せにするために私たちを支配するの
です。

何と快い帝国でしょう！

ダフネ

もし恋が私にはそれほど心地よくないような

ら、
そんなに危険だとは思わないでしょう。

シルヴァンドル

何をおっしゃるんですか？

ダフネ

ああ、何ということ！

(プレリユードが聞こえる。)

人々が来るわ、新たな祝祭のために

各人が支度をします。

シルヴァンドル

今日、私は歌うことになる、

甘美なアムールとその絆を。

ダフネ、恋の喜びを歌えばいいのでしょうか、
それとも苦しみを？

ダフネ

羊飼いさん、恋を嘆くことなど全くありません。

第三場

(ダフネ、シルヴァンドルに扮する愛の神アムール、祝祭競技の審判テルサンドル、羊飼いイラス、羊飼いの一団)

テルサンドル

ヴィーナスは息子の魅力を我々に歌わせるために、

我々の競技の勝利者に、褒美を提案している。

女神の恩寵に値するように、

駆けつけなさい、急ぎなさい。

比類なき心地よい歌を歌いなさい。

女神の恩寵に値するように。

合唱

女神の恩寵に値するように、

駆けつけましょう、急ぎましょう。

比類なき心地よい歌を歌いましょう、

女神の恩寵に値するように。

テルサンドル

駆けつけなさい、急ぎなさい。

アムールに賛同して、グロワール（栄光）も
我々を呼んでいる。

合唱

駆けつけましょう、急ぎましょう。

アムールに賛同して、グロワール（栄光）も
我々を呼んでいる。

イラス、愛の神アムールへの賛歌

この地であらゆる心が満足し、

平和であるのを目にするなら、

アムールにこの幸せを負っているはずだ。

素晴らしいこの地では、あらゆる心が繊細であるから。

愛していれば、一つのことだけしかない。

愛していなければ、山ほどのことがある。

ああ、この安らぎは何とうっとりさせることか！

羊飼いたちよ、心穏やかになるために愛さなければ。

かつては、たくさんの厄介な気掛かりが
この上ない苦しみを引き起こしていた。

恋するようになってからは、

愛するものに気に入られることしか専念しない。

(踊る)

シルヴァンドル、愛の神アムールへの賛歌

魅力ある勝利者よ、愛すべき支配者よ、

アムール、お前だけが我々の願いをいやしてくれる。

我々が生まれたのは運命によってなのだ、

我々を幸せにするのはお前によってなのだ。

大地と水の神々は

優しい願いにすべてをおっている。

神々は世界の庇護に退屈するだろう、

もしお前が喜びをそこに組み込まなければ。

お前が我々に課する掟に
いかなる心がこれまであらがったことか？
お前は自然であることと美によって
常に我々に教えてくれる。

テルサンドル

羊飼いたちよ、誰かまだ自分の声を聞かせたい
者、
ヴィーナスとその息子について歌いたい者はい
るか？

合唱

いいえ、私たちは全員シルヴァンドルに負けま
した。

彼の歌は褒美に値します。

(テルサンドルはダフネにギンバイカの冠を渡
す；彼女はシルヴァンドルに捧げる)

テルサンドル

羊飼いや、栄光を享受せよ、
これほど輝かしい勝利の。
ヴィーナスはこの日、お前に
この上なき素晴らしい冠を与える。
そして、アムールにさらに報いるために
この上なく美しい羊飼いや女がここでお前にそれ
を差し出す。

合唱

羊飼いや、栄光を享受せよ、等。

羊飼いや女

素晴らしいこの地で全ては私たちの願いを満た
しています。

私たちは最も心地よい絆を携えています。

純真さは苦悩を遠ざけ、

アムールは喜びを導いてくれます。

勝ち誇れ、アムール、貴方の勝利を喜んでくだ
さい。

全ては耀く賛辞を貴方の威力にささげます。

そして宇宙は、自然が築き上げ、貴方の栄光に

捧げる

活気のある神殿なのです。

勝ち誇れ、アムール、貴方の勝利を喜んでくだ
さい。

全ては貴方の威力に耀く賛辞をささげます。

合唱

羊飼いや、等。

第1幕の終わり

第2幕 町

(舞台は人里離れた静かな場所。片方の窪みに
海が、もう一方に占い師お決まりの住処である
洞窟が見える。)

第一場

(アルシドンに扮する愛の神アムール、占い師)

愛の神アムール、占い師に

どのような運命が待っているか、あなたに聞く
ために

リュシルはこの地に赴くはずです。

気の効いたお告げで、彼女をびっくりさせてく
ださい。

私の思いを果たすために準備は全てしました。

占い師

まもなく我々はリュシルを知ることになろう。

彼女の心が誠実な情熱を

感じ取るのに適しているかどうか解ろう。

愛の神アムール

アルシドンの名のもと、町で愛をささやき、

リュシルは耳を傾け、私の恋の炎を分かち合う。

しかし、成功したにもかかわらず、私は幸せで
はないのです。

恋人たちの賛辞は彼女をあまりにも喜ばせるの
で

彼女の方から然るべく愛することなどできないの

です。

気に入られようと望むことで枯渇した心には、
アムールのために何も残っていません。

占い師

美しい人が変わらぬ気持ちで
恋するのは容易ではない。
一人の愛想の良い恋人の言葉で
いつも移り気になってしまう。

危険は魅力的だし、
絶え間なく彼女の周りを舞っている。
一瞬で十分だ、

恋人を浮気にさせるのに。
美しい人が変わらぬ気持ちで
恋するのは容易ではない。

愛の神アムール

私からと知らせずに、祝い事、贈り物を
日々彼女に捧げている。
彼女は彼女を恋する見知らぬ人から受け取って
いると思っている。

おそらく、このような策略に魅せられ、
見知らぬ人を優遇し、彼女の心は私を裏切るだ
ろう。

彼女はすでにこの恋人が寛大だと見なして、
移り気から少なくとも私たち二人の間を揺れ動
いている。

占い師

貞操はぐらつき、
まさに軽薄さに似てくる。
忠実だったらと考えるのは
不実だからなのだ。

愛の神アムール

リュシルが来る、この場を離れよう。
まだ彼女の目前に現れる時ではない。

第二場

(ベロエ、リュシル)

ベロエ

どうして移り気なのが恥ずかしいのでしょうか？

すぐに自由の身になってください。

アムールが貴女にいつそう輝かしい賛辞をもた
らすとき、
貴女に心変わりを気づかせます。

どうして 等。

リュシル

無駄です、アルシドン私を私の心から遠ざけたく、
もっと栄光ある選択をしたいのだけれど。

私の心はうっとりしい言葉を私に囁くのです。
恋の炎に決着をつけたいという願いにもかかわらず、

アムールはあくまで彼の権利を要求していま
す。

おお、神々よ！もし私が移り気なら、
あまりにも感受性の強いアルシドン、あなたは
どうなるでしょう？

私たちはお互いに永遠の情熱を約束し合いまし
た。

ベロエ

無意味なためらいが貴女を引き止めなければな
らないのですか？

常に変わらない炎を誇りに思っははいけません。

貴女、あるいはあの方は、理由もなく、何日か
で変わるかもしれません。

この不幸を予測してください、アムールが貴女
に

輝かしい口実を示すとき、心変わりを受け入れ
てください。

リュシル

神々よ！貴女の意見に従うのがなんて苦しいの
でしょう！

ペロエ

貴女は私の意見に従って本当に良かったと思う
でしょう。

占い師が、間もなくこの地に現れます。

貴女はその見知らぬ恋人が誰か知らされるで
しょう。

占い師がその人を貴女に引き合わせるや否や、
疑いもなく、貴女の心は予測したほどにはいか
ないでしょう。

第三場

(リュシル、占い師、ペロエ、占い師の従者)

ペロエ

おお、心許せる運命の友、
貴方の光がこの上なく暗い未来の闇を貫き、
この美しい女の身の上の秘密を
我々に明かしてください。

占い師

至高なる術は私の威力に服従し、あなたがた、
この壮大な宇宙の魂よ、
諸元素をつかさどる霊よ、
あなたがたの服従を私に示してくれ。
飛翔せよ、私の声に合わせて疾走せよ、
我が掟を認めよ。

(突然、四大精霊が現れる：空気の精シルフが
上空より飛翔しながら登場、地の精グノームは
地中より出現、窪みに見える海より水の精オン
ダンが、火の渦が火の精サラマンドルを運んで
くる：舞台は暗くなり、星光りのみ照らしてい
る。)

(踊る)

占い師

消え去れ、貫き抜けられない幕よ、

好奇心ある人間にその未来を隠している。

我々の恐るべき祭儀で、
神々の秘密に入り込もう。

合唱

消え去れ、等

占い師

力強き天体よ、その影響は
人間の境遇を決める。

あなたがたは人間の誕生を、
そして彼らの楽しみと苦しみをつかさどってい
る。

我々の目に、リュシルの運命を見せてくれ。

合唱

消え去れ、貫き抜けられない幕よ、
好奇心ある人間にその未来を隠している。
我々の恐るべき祭儀で、
神々の秘密に入り込もう。

占い師、リュシルに

定められた運命を

知りたいと思う貴女よ、
リュシル、なんと幸運な運命か！
アムールが貴女の魅力に恋焦がれている。

リュシル

ああ、なんとありがたいこと！

占い師

我々は、アムールの熱烈な望みを果たした。
ここから去ろう、これで十分だ。

第四場

(ペロエ、リュシル)

ペロエ

なんとという勝利！神々よ！なんとという栄光！
貴女の魅力でアムールさえも呪縛されました。

リュシル

終わりです。アルシドン、勝利をアムールに

譲ってください。

アムールが、アムールのみが愛される価値があるのです。

(静寂が消え去り、そして魅力ある庭園に変わる。)

でも、私は何をみているのでしょうか！どのような神が、この未開の地を一瞬にして比類なき魅力ある地にしたのでしょうか？

ペロエ

アムールの賛辞を受け止めてください。

この素晴らしい場所は貴女の魅力があつてこそです。

リュシル

なんとうっとりする楽の音でしょう！なんと耳に心地よいのでしょうか！

なんと心ひかれる光景が私の目前に繰り広げられているのでしょうか！

第五場

(リュシル、ペロエ、愛の神の従者を連れた西風の神ゼフィール)

合唱

この上なく美しい絆を深めなさい。

愛しなさい、若き美しい女、決して心変わりせず。

アムールは貴女の魅力を褒め称えています。

その心に報いるため、貞節であるべきです。

この上なく美しい絆を深めなさい。

愛しなさい、若き美しい女、決して心変わりせず。

(踊る)

西風の神ゼフィール

結び目を解くために

絆を手にするには

及びません。

移り気なのは

愛さずに

身を投じるからです。

冷淡で美しい女は

愛することになったとき

その女(ひと)に苛立つ

アムールを鎮められます。

不実の女には

アムールの報いはありません。

結び目を解くために 等

リュシル

ああ！私の貞節が確かでありますように。

魅力的な神が、現れますように。

私の熱意で私の恋の炎を判断してくれますように！

ああ！私の貞節が確かでありますように。

魅力的な神が、現れますように。

でも…ああ、どうしたことか、アルシドンが近づいて来る！

彼になんと言おう、偉大なる神々よ！

第六場

(アルシドンに扮する愛の神アムール、そして前場の登場人物たち)

アルシドン

幸せに導かれて私はこの地に来ました。

リュシル、これほど魅力的な貴女に会えるのはなんと喜ばしいことか！

私を魅了した幸せに何の不足もないように、

私の愛情のほとばしりを分かちあってください、私の恋の炎に答えてください。

そして私の心も眼差しも満足させてください。

リュシル、困惑して

アルシドン…信じてください…愛の束縛には…危険すぎる喜びがあります。

アルシドン

リュシル…いつから貴女はこのような話し方をするようになったのですか？

ベロエ

これ以上のめり込まないように、彼女は結び目を断ち切りました。

今や彼女が無視する祝福を捧げるのはやめてください。

期待であなたは恋の炎を灯し、まさしく失望して恋の炎を消すのです。

アルシドン

リュシル、貴女はこのような耐え難い話を告白するのですか？

リュシル

恩知らず者をお忘れください。

アルシドン

私はいつまでも貴女を愛したいのです。

リュシル

あなたの情熱は無駄に輝いています。

アルシドン、永久に私は恋を放棄します。

合唱

貴女はこの上なく激しい炎でアムールの情熱を掻き立てた。

若き美しい女、貴女の心を今度はアムールが支配するように。

アルシドン

これこそ貴女の冷酷無情なつれなさの理由です。

貴女は不実な女だ。

リュシル

アムールは私の足元に不滅の偉大さを注ぎました。

私がアムールを軽蔑したのなら、彼は恐ろしい

ほど激怒したでしょう。

ベロエ

彼女はこれほど素晴らしい絆を拒否できるのでしょうか？

アルシドン

そのいわれのない望みをなるべく早く諦めてください、

私の情熱に、私の誠実な心に委ねてください。

貴女の心は私の恋の炎を選んだのです。

けれども、もっと輝かしい選択が貴女の恋の憧憬を逸らします。

そのいわれのない望みをなるべく早く諦めてください。

私の情熱に、私の誠実な心に委ねてください。

ああ、なんとということ！威力の輝きは

喜びの魅力に相当するのでしょうか。

合唱

貴女はこの上なく激しい炎でアムールの情熱を掻き立てた。

若き美しい女、貴女の心を今度はアムールが支配するように。

アルシドン

もう終わりだ、つれない女、貴女はもはや私を愛していない。

リュシル

あなたは私の気持ちに対し余計な努力をしています。

愛の神アムール、西風の神ゼフィールに

私の心は希望を抱いていたが、無駄だった。

ゼフィール、あなたは私の恋の炎の報いがわかる。

離れよう、この町にはがっかりした。

ローマ人の宮廷に、エミールという名で、新たな絆を探しに行こう。

多分、宮廷では私はもっと幸せだろう。

愛の神アムール、リュシルに
別の地で別の愛の誓いが私を呼ぶ、
貴女の魅力はアムールの賞賛に値しました。
だが、この日アムールは貴女から逃れます。
美しいことは十分ではありません。
私の心にふさわしくあるためには、貞節でなければならぬのです。

(アムールはゼフィールとその従者とともに去る。舞台は初めの場が現れる、そしてリュシルは1人ペロエと残る。)

リュシル
私からアムールが去っていく！
ああ！なんという運命の変化なのでしょう！
なんという耐え難い恥辱なのでしょう！

第2幕の終わり

第3幕 宮廷 (第1版)

(舞台は祝祭が準備された、オーギュストの宮殿の間。)

第一場

(エミールの名のもとローマの廷臣に扮する愛の神アムール)

エミール
恋の炎は受け入れられ、私の愛する王女は
ついに私の情熱に応えてくれる。
しかし彼女の心をあてにできるのだろうか。
浮気な女は心を与え、またすぐ取り戻すのだろうか？
移り気で女の気を引こうとするオーヴィッドの
要求を
ジュリーは拒否したようだ。
だが、彼女は密かに彼の恋の炎に身を任せている
かもしれない。
不実であると同時に背信で、

彼女は我々2人を裏切っているかもしれない。
オーヴィッドが来る、彼を驚かしてやろう。
移り気だと、たやすくおしゃべりになる。
彼の幸せが秘密なら、
おそからず彼自身私に教えてくれるだろう。

第二場 (エミールの名のもとローマの廷臣に扮する愛の神アムール、オーヴィッド)

エミール
あなたの心はなんらかの新たな征服を
いつも自慢している。
移り気で気まぐれ、あなたは美しい女から美しい女へと走り回っている。
あなたはつれない女を愛すのがうってつけだろう。

しかしアムールがあなたを手助けし、全てはあなたにとりうまく行っている。

オーヴィッド
移り気な男は、愛している女のそばでは、
忠実な恋人のように、愛されうる。
美しい女は誰もが
移り気を繋ぎ止める名誉に値すると信じている。

恋人が束縛から離れてきたばかりというのは
その女への賞賛さえ増大させるのだ。

エミール
移り気な男はどこでも嫌われるはずだ。
心変わりには裏切りだ。

オーヴィッド
貞節が鬱陶しくなったとき、
別の絆を選ばなければならない。
この感情の動きのみに、心は従うべきだ。
愛は喜びだ。

もし義務だったら、苦痛だろう。

エミール

あなたは愛の神秘さを知っている。

オーヴィッド

必要ならシテール島の神に

私から説教しよう。

私は神秘さを愛の術で見抜くことができた。

結局は我々が勝利者にならないような

つれなく美しい女はいない。

心を捧げることができる恋人は

いつも好まれることは間違いない。

エミール

しかしながら、王女はあなたの願いを無視し、

あなたは勝利していない。

オーヴィッド

いや、私の栄光をこのように汚したままにはできない。

私の恋の炎の成功を聞いてくれ。

この地で輝かしい祝祭が準備されている。

嫉妬深い視線を欺く扮装をして、

その場で私を虜にした美しい女に秘密裏に会えるだろう。

これほど甘美な勝利を私が隠すことを彼女は望み、

アムールと我々の間の秘密にしておくのだ。

私を信頼して振る舞ってくれ。

私は秘密を守った方がいいと勧められている。

エミール

王女はあなたをととても控えめな恋人として愛している。

オーヴィッド

私の幸せは完璧ではないかもしれない、

もし私がいつもそれを隠し事しておいたら。

表に現れない賛辞は

シテール島の神を怒らせる。

神が我々のために行った善をあくまで黙ってしようとするのは

神が我々に施した善を恥じることなのだ。

私の幸せは完璧ではないかもしれない、

もし私がいつもそれを隠し事しておいたら。

おや、祝祭が始まろうとしている。

扮装のために、急いで仕度しよう。

第三場

(エミール、仮面をつけた王女ジュリー、仮面をつけたオーヴィッド、仮面の一団)

合唱

君臨せよ、アムール、我々の魂を魅了せよ、

勝利せよ、お前の矢を飛び交わせよ。

我々の心をお前の炎に委ねよう、

注げ、お前の全ての善を我々の心に。

(踊る)

仮面の男

我々が扮装しているという錯覚は

アムールの支配者である人たちのためではない。

恋人たちの瞳を輝かせる炎は

恋人たちがお互いに認め合う助けとなる。

(踊る)

仮面の男

アムールとフォーリー（狂気）に従おう。

彼らは魅力的な運命を私たちに与えてくれるだろう。

アムールは人生の魂で、

フォーリーは人生の飾りだ。

絆の心地よさに

アムールがやるせなさを加えたら、

フォーリーは苦悩を眠らせ

快楽を目覚めさせる。

アムールとフォーリーに従おう。等

(踊る)

仮面の男

アムールの栄光を歌おう、
その名がこの地に飛翔するように。
人間たちにも、神々にも
アムールは勝利をもたらす。
神々は雷鳴を轟かし、
英雄たち、戦いの雷霆は
彼らの方からアムールの掟に服する。
そしてこれほど恐ろしい神々、
無敵の戦士たちは
我々と同様、愛情深いアムールの放つ一本の矢
の価値しかない。

アムールの、等

仮面の男

輝け、ガラス（恵み）たちよ、輝け、この地
で勝利を収めよ。
アムールとボテ（美貌）は我々のたわむれの真
髓なのだ。
仮面はあなたに武器を与える。
全ての眼差しからあなたを隠せば隠すほど、
ますますあなたの魅力が求められるのだ。

輝け、等。

第四場

（仮面をつけたジュリー、仮面をつけたオー
ヴィッド、エミール）

オーヴィッド

慎みない人たちの一団から離れたこの場で、
私の運命について貴女の美しい瞳に問うことが
でき、
その美しい瞳はこの上なく完璧な情熱を私に吹
き込むことができた。
それだけでも、私の心にとり得難い喜びだ。

そして、アムールは私の恋の炎をかなえてくれ
るであろう、
もし彼が貴女の瞳の中と同様、貴女の心を支配
しているのなら。

（エミールが現れる。）

ジュリー

あっ！誰か来る、逃げましょう…。
（オーヴィッドは片方に立ち去り、ジュリーは
もう一方に。しかしエミールは止める。）

エミール

待って、待ってください。
ああ、貴女が誰かわかります。待ってください。

ジュリー

やめて下さい…。

エミール

貴女が誰かわかります、抵抗しても無駄ですよ。
貴女は誰からも愛される人です。

貴女が誰かわかります、抵抗しても無駄ですよ。

ジュリー

ああ！私をほっておいてください…。

エミール

いっそう確かな真実によって
さらに貴女に証明しなければなりませんか？
もし貴女が、忠実な情熱を燃えたたせられれば、
貴女の魅力は愛情にとって、疑いない武器なの
です。

貴女の美しさに魅了されますが、貴女の心には
恐れます。

そしてこの疑いは貴女の魅力の成果を破壊して
しまいます。

貴女には忠実な恋人がいましたが、
オーヴィッドのせいでその恋人を裏切りまし
た。

彼は貴女を導く情熱を知り尽くしています。
だが、彼はこのような仕打ちに愚痴をこぼしま

せん。
彼の心は、貴女の絆に今や何も止めておくもの
はなく、
征服に失敗して、その価値を知るのです。
ジュリー、仮面をとりながら
ああ！無礼なお話しは聞き飽きました。
いいんです、もう疑わないでください、エミール、
これが私なのです。
本当です、私は心変わりしました。私が愛して
いるのはもうあなたじゃありません。
さあ、私から永久に遠ざかって下さい。

第五場

愛の神アムール

終わりだ、私の羊飼いの女のもとに戻ろう。
彼女の貞節さを信じよう。
ああ、一体何が誠実な心にさせるのだろう
率直さの他に？

第3幕の終わり

第4幕 帰還

(舞台は愛の神アムールの宮殿。西風たちはまどろんでいるダフネを雲に乗せて運んでくる。)

第一場

(西風の神ゼフィール、西風たちの一団)

西風の神ゼフィール、自分の従者に

もういい、ダフネをこの宮殿に残しておこう。
さあ、アムールの計画を果たしなさい。
(心地よい音楽が奏でられ、その間にダフネは目覚める。)

第二場

ダフネ

心地よいまどろみ、哀れな人の苦痛を一瞬忘れ

させてくれる、
いつまでも終わりにならないで。
お前のこの上なく快い夢は
私たちの心残りを増すだけです。
お前が私たちに約束した夢想の善は
目覚めたときに真の苦痛になるのです。

心地よいまどろみ、 等

何という魅惑的な夢が私の想いに現れたのかしら？

私はシルヴァンドルに再会し、彼の揺るぎない
愛を見たのです…

やみくもな情熱の生むたわいない希望…

でも、私は一体何を見ているのでしょうか！この
輝く宮殿は何なのでしょう！

第三場

(ダフネ、西風の神ゼフィール)

ダフネ

私はどこにいるのでしょうか？教えて下さいませ
んか。

西風の神ゼフィール

羊飼いの女よ、貴女はアムールの宮殿にいるので
す。

この魅力ある場所で、全てはアムールの絶対的
権威を受け入れるのです。

この場にみなぎる雰囲気によって

貴女はこの場所を知っているはずです。

ダフネ

でも、どうぞ…続けてください…、いかなる至
高なる権力が

この地に私を連れて来たのでしょうか？

西風の神ゼフィール

貴女はここでこの上なく幸せな運命を見つける
でしょう。

ダフネ

それじゃ、アムールは私を掻き乱す不安を終わらせてくれるのでしょうか？

辛い別離を永遠に終わらせて、

この地で再びシルヴァンドルに合わせてくれるのでしょうか。

優しいアムール！すぐにでも私の目の前に彼を連れてきて下さい。

私たちを苦しめてお前の威力を示すことはもうたくさんです。

魅力ある神よ！私たちの喜びがさらによりよくお前の威力に仕えるでしょう。

西風の神ゼフィール

シルヴァンドル、と言いましたね？彼の移り気の後で！

貴女には彼が我慢ならないはずですよ。

ダフネ

なんということ！あなたは私の心に致命傷を与えるのですね。

そして、この残酷な別離の後に

どんな幸せを私は期待できるのでしょうか！

西風の神ゼフィール

アムールはどうしたらそれを償えるのか貴女に申し出るでしょう。

新たな絆を彼が選んだとき、

移り気な恋人をまねて下さい。

もっとたやすく忘れるために、

忠実な恋人を選んでください。

ダフネ

私から気持ちの離れたつれない人が、

私も彼から離れてもいいと思うなんて無意味です。

誠実ではない恋人だとしても、

私の愛する恋人じゃなくはありませんか？

西風の神ゼフィール

つれない人が貴女を不幸にするとしても

貴女の心残りは力なく、彼を取り戻すことはできないでしょう。

しかし、さらに優しい恋人の救いの手が

貴女の涙をたやすく拭ってくれるでしょう。

ダフネ

その浮気な人が私を捉える情熱に

いつも優しく応えてくれていたら、

アムールはこれ以上完璧ではないくらいの賞賛を受けたでしょう。

不実の人がこの日彼の初めの束縛を

再び手にするようにしてください。

あなたの栄光でできるでしょう、アムール！

あなたのさらに素晴らしい仕事を完成してください！

西風の神ゼフィール

これからは、抑えなさい、

無力の炎の無駄なほとばしりを。

シルヴァンドルは自分を魅了した人と

この地で永遠に結ばれるでしょう。

人々はこの素晴らしい結婚を祝うためにここに集まります。

ダフネ

なんとおっしゃったのでしょうか、偉大なる神々よ！

西風の神ゼフィール

これからは、抑えなさい、

無力の炎の無駄なほとばしりを。

第四及び最後の場

(西風の神ゼフィール、ダフネ、シルヴァンドルに扮する愛の神アムール、羊飼いに扮するアムールたちの一団)

合唱

祝おう、忠実な羊飼いの愛を。

讀えて歌おう、忠実な羊飼いなを。
シテール島の神はかつて
彼の掟に従わせることはなかった、
これほど忠実で、これほど好まれるに値する二人の恋人たちを。

祝おう、等
ダフネ

やめてください！あなたがたはこの上なく移り気な恋人に
忠実な羊飼いなという素晴らしい呼び名をつけました。
その恩知らずの人は私に永遠の情熱を約束しました。
いいえ、彼が類いなく魅惑的な絆を結んでも、彼の新たな優しさを讀えるなどできません。
私の苦しみはあなたがたを認めません。

やめてください！ 等

でも、私が見ているのはあの人、この瞬間に自分の怒りと心の痛みさえも忘れている。
ああ！あの人を愛していることだけ覚えている。

(シルヴァンドルに)

恩知らずな方！良心の呵責も悔いもなく、あなたを導く新たな情熱に従うのですか？
裏切り者、あなたは忘れてしまったのですか、永遠に変わらないと私に約束したことを？
でも、私を見捨てるこの不実の人をむしろ忘れましょう。
アムールさえも同意して、グロワール（栄光）はそれを命じます。
弱々しい努力、ああ！あの人に誠実さがなくても、虜になっている私の情熱は弱まるどころか、

その不実さゆえ私の優しさは、
不実の人が私へ向けて燃やすはずのあらゆる恋の炎を補っているのです。

愛の神アムール

もう十分です、魅力的な羊飼いなさん、貴女は間違いを追い払わなければなりません。
これほど素晴らしい情熱を持つ恋人をもっとよく知って下さい。
もう羊飼いなではありません。シテール島の神です。

貴女の喜びがその神の幸せを生み出します。

ダフネ

ああ、なんとういうこと！

愛の神アムール

私は貴女の美しい瞳の威力に気づきました。
けれども、貴女の心を試したかったのです。
貴女の忠実さは私の変わらぬ誠実さにふさわしい。

ダフネ

では、アムールは私の恋心に火をつけることができた方なんですね？
魅力的な神よ、私の恋の炎はもうこれ以上優しくはならないでしょう。

私の心はもうすでにシルヴァンドルを愛していました、

彼が愛せるのと同じくらいに。

愛の神アムール

この愛らしい征服されし女（ひと）は、私の心にとり

我が帝国の他のものより、ずっといとしい。

(ダフネに向かって)

私の心を征服して下さい、この愛らしい勝利者私のあらゆる望みを満たして下さい。
私は自分の栄光しか認めなかったが、貴女の美しい瞳を見て、喜びを知りました。

合唱

飛翔せよ、結婚の神イメン、シテール島に戻れ。
お前はこんなに魅力的な絆を未だかつて作りあげなかった。

お前は比類なく美しい羊飼いの女と
比類なく優しい恋人を結びつけるだろう。
飛翔せよ、結婚の神イメン、シテール島に戻れ。

小合唱

アムールはお前に愛される術を教えるだろう。
忠実であるという術を教えてあげなさい。

大合唱

飛翔せよ、結婚の神イメン、シテール島に戻れ。

愛の神アムールとダフネ

飛翔せよ、優しいプレジール（喜び）たち、私たちの幸せのために来ておくれ。

勝利せよ、私たちの心に君臨せよ。

私たちはこの上なく心地よい恋の炎を燃やそう。

できるなら、私たちのありあまる恋の炎と対等になれ。

シテール島住人の男

ああ！ なんとという喜びをアムールは私たちに与えてくれるのだろうか！

その掟のもと、なんと幸せな運命なのだろうか！

彼から手渡されたギンバイカは
戦いの神ペローヌのあらゆる月桂樹の栄冠に匹敵する。

そして最も幸せな人間たちは
シテール島で冠を授かった人々である。

大小合唱

飛翔せよ、結婚の神イメン、等

第4 および最終幕の終わり

補遺 2

オペラ・バレ全作品

B : ballet, BH : ballet héroïque, P : Prologue, E : Entrée, A : Acte, I : Intermède

初演	台本(楽譜) の題	ジャンル	台本作家	作曲家	各幕の題
1695	Le Ballet des Saisons	B	J. Picque (Pic)	P. Collasse L. Lully	P/E1[Printemps]/E2[Été]/E3[Automne]/E4[Hiver]
1697	L'Europe Galante	B	A.H. de La Motte	A. Campra	E1[=P : Forge Galante]/E2 : La France/E3 : L'Espagne/E4 : L'Italie/E5 : La Turquie
1700	Le Triomphe des Arts	B	A.H. de La Motte	M. de La Barre	E1 : L'Architecture/E2 : La Poésie/E3 : La Musique/E4 : La Peinture/E5 : La Sculpture
1703	Les Muses	B	A. Danchet	A. Campra	P/[E1]La Pastorale/[E2]La Satyre/[E3]La Tragédie/[E4]La Comédie
1710	Les Festes Vénitienes	B	A. Danchet	A. Campra	P : Le Triomphe de la Folie sur la Raison/E1 : La Feste des Barqueroles/E2 : Les Sérénades et les Joüeurs/E4 : Les Saltinbanques de la Place Saint Marc
1713	Les Amours Déguisés	B	L. Fuzelier	Th.-L. Bourgeois	P/E1 : La Haine/E2 : L'Amitié/E3 : L'Estime
1714	Les Festes de Thalie Les Festes, ou Le Triomphe de Thalie (楽譜)	B	J. de La Font	J. J. Mouret	P/E1 : La Fille/E2 : La Veuve Coquette/E3 : La Femme
1715	Les Plaisirs de la Paix	B	Mennesson	Th.-L. Bourgeois	P/Intermède1/E1 : L'Assemblée/I2/E2 : Feste de Buveurs/I3/E3 : La Jaloux Puni, ou La Sérénade/I4
1716	Les Festes de l'Été	B	S.-J. Pellegrin, 又 は M.A. Barbier	M. P. de Montéclair	P/E1 : Les Matinées de l'Été/E2 : Les Jours de l'Été/E3 : Les Soirées de l'Été/E4 : Les Nuits de l'Été
1718	Les Âges	B	L. Fuzelier	A. Campra	P/E1 : La Jeunesse, ou L'Amour Ingénu/E2 : L'Age Viril, ou L'Amour Coquet/E3 : La Vieillesse, ou L'Amour Enjoué
1719	Les Plaisir de la Campagne	B	S.-J. Pellegrin (M.A. Barbier の 名で?)	T. Bertin de La Doué	P/E1 : La Pesche/E2 : La Vendange/E3 : La Chasse
1721	Les Éléments	B	P.-Ch. Roy	A. C. Destouches, M. R. de Lalande	P/E1 : L'Air/E2 : La Terre/E3 : L'Eau/E4 : Le Feu/ Epilogue
1723	Les Festes Grecques et Romaines	BH B (楽譜)	L. Fuzelier	F. Collin de Blamont	P/E1 : Les Jeux Olympiques/E2 : Les Bacchanales/E3 : Les Saturnales
1726	Les Stratagèmes de l'Amour	B	P.-Ch. Roy	A. C. Destouches	P/E1 : Scamandre/E2 : Les Abderites/E3 : La Feste de Philotis
1727	Les Amours des Dieux	BH	L. Fuzelier	J. J. Mouret	P/E1 : Neptune et Amymon/E2 : Jupiter et Niobé/ E3 : Apollon et Coronis/E4 : Bacchus et Ariane

初演	台本(楽譜) の題	ジャンル	台本作家	作曲家	各幕の題
1729	Les Amours des Déesses	BH	L. Fuzelier	J. B. M. Quinault	P/E1 : Venus et Adonis/E2 : Diane et Endimion/E3 : Melpomène et Linus/E4 : L'Aurore et Céphale
1732	Le Ballet des Sens Le Triomphe des Sens (楽譜)	B BH(楽譜)	P.-Ch. Roy	J. J. Mouret	L'Odorat/E2 : Le Toucher/E3 : La Vue/E4 : L'Ouïe/ E5 : Le Gout
1733	L'Empire de l'Amour	BH	F.-A. Paradis de Moncrif	R. de G. de B. Marquis de Brassac	P/E1 : Les Mortels/E2 : Les Dieux/E3 : Les Génies du Feu
1734	Les Festes Nouvelles	B	J.-B. Massip	Duplessis (le Cadet)	P/E1 : Ulysse et Circé/E2 : Le Bal Champêtre/E3 : Le Triomphe de l'Amour sur Bacchus
1735	Les Grâces	BH	P.-Ch. Roy	J. J. Mouret	P/E1 : L'Ingénue/E2 : La Délicatesse/E3 : L'Enjouée
1735	Les Indes Galantes	BH	L. Fuzelier	J.-Ph. Rameau	P/E1 : Les Incas du Pérou /E2 : Le Turc Généreux/ E3 : Les Fleurs, feste persane
1736	Les Voyages de l'Amour	B	Ch. A. Le Clerc de La Bruère	J. Bodin de Boismortier	P/A1 : Le Village/A2 : La Ville/A3 : La Cour/A4 : Le Retour
1736	Les Romans	BH	L.-Ch.-M. de Bonneval	J.-B. Niel	P/E1 : La Bergerie/E2 : La Chevalerie/E3 : La Féerie
1736	Les Génies Les Génies, ou Les Caractères de l'Amour (楽譜)	B	N. ? ou Jacques ? Fleury	Mlle Duval	P/E1 : Les Nymphes ou L'Amour Indiscret/E2 : Les Gnomes ou L'Amour Ambitieux/E3 : Les Salamandres ou L'Amour violent/E4 : Les Sylphes ou L'Amour Léger
1736	Les Caractères de l'Amour	BH	A. Ferrand, A. Tanevot, S.-J. Pellegrin	F. Colin de Blamont	P/ [E1] : L'Amour Constant/[E2] : L'Amour Jaloux/[E3] : L'Amour Volage
1737	Le Triomphe de l'Harmonie	BH	J. J. Le Franc	F. L. Grenet	P/E1 : Orphée/E2 : Hylas/E3 : Amphion
1738	Le Ballet de la Paix	B	P.-Ch. Roy	F. Rebel, F. Francœur	P/E1 : Phillis et Demophon/E2 : Iphis et Iante/E3 : Philemon et Baucis
1739	Les Fêtes d'Hébé ou Les Talents Lyriques	B	A. G. de Mondorge (P.-J. Bernard, La Pouplinière, S.-J. Pellegrin)	J. -Ph. Rameau	P/E1 : La Poésie/E2 : La Musique/E3 : La Danse
1743	Le Pouvoir de l'Amour	B BH(楽譜)	C.-H. Fusée de Voisenon	J.N.P. Royer	P/E1[Les Jardins de la Fée] /E2[Le Temple de Bacchus] / E3[Un Lieu sauvage]
1743	Les Caractères de la Folie	B	C. P. Duclos	B. de Bury	P/E1 : L'Astrologie/E2 : L'Ambition/E3 : Les Caprices de l'Amour

初演	台本(楽譜) の題	ジャンル	台本作家	作曲家	各幕の題
1744	L'École des Amans	B	L. Fuzelier	J.-B. Niel	P/Leçon1 : La Constance Couronnée/Leçon2 : La Grandeur Sacrifiée/Leçon3 : L'Absence Surmontée/Leçon4 : Les Sujets Indociles
1745	Les Festes de Polimnie	BH	L. de Cahusac	J.-Ph. Rameau	P/A1 : La Fable/A2 : L'Histoire/A3 : La Féerie
1745	Le Temple de la Gloire	Feste/ Opéra	F.-M. A. Voltaire	J.-Ph. Rameau	A1[=P] : [La Caverne de L'Envie]/A2 : [Le Boccage des Muses]/A3 : [L'Avenue et la Frontispice du Temple de la Gloire]/ A4 : [La Ville d'Artaxati]/A5 : [La Temple du Bonheur]
1746	La Félicité	BH	P.-Ch. Roy	F. Rebel, F. Francoeur	P : Les Jeux Actiens/Le Séjour de la Félicité/Les Sources de la Félicité/L'Age de la Félicité
1747	L'Année Galante	B	P.-Ch. Roy	Ch.-L. Mion	P/L'Hiver/Le Printemps/L'Été/L'Automne
1747	Les Festes de l'Himen et de l'Amour, ou Les Dieux d'Egyte	BH	L. de Cahusac	J.-Ph. Rameau	P/E1 : Osiris/E2 : Canope/E3 : Arueris ou Les Isies
1748	Les Surprises de l'Amour	Diver- tissement	P.-J. Bernard	J.-Ph. Rameau	P : Le Retour d'Astrée/B1 : La Lyre Enchantée/B2 : Adonis
1750	Les Festes de Thétis	BH	P.-Ch. Roy	F. Colin de Blamont, B. de Bury	P/A1 : Egine/A2 : Titon et L'Aurore
1750	La Journée Galante	BH	P. Laujon	P. de La Garde	A1 : Le Matin ou La Toilette de Vénus/A2 : Les Amusemens du Soir ou La Musique/A3 : La Nuit ou Léandre et Héro
1752	Les Amour de Tempé	BH	Abbé Marchadiès	A. Dauvergne	E1 : La Bal ou L'Amour Discret/E2 : La Feste de l'Himen ou l'Amour Timide/E3 : L'Enchantement Favorable ou L'Amour Généreux/E4 : Les Vendanges ou L'Amour Enjoue
1758	Les Fêtes de Paphos	BH	J.-B. Collet de Messine Ch.A. Le Clerc de La Bruère, C.-H. de Fusée de Voisenon	J.-J. Cassanéa de Mondonville	A1 : Venus et Adonis/A2 : Bacchus et Érigone/A3 : L'Amour et Psyché
1758	Les Fêtes d'Euterpe	B	F.-A. Paradis de Moncrif, A. Danchet, Ch.-S. Favart, P.N. Brunet-Debaines	A. Dauvergne	E1 : La Sybille/E2 : Alphée et Aréthuse/E3 : La Coquette Trompée/E4 : Le Rival Favorable

初演	台本(楽譜) の題	ジャンル	台本作家	作曲家	各幕の題
1766	Les Fêtes Lirique	BH	M. de Bonneval, L. de Cahusac, F.-A. Paradis de Moncrif,	L. J. Francœur, J.-Ph. Rameau, P. M. Berton	E1 : Lindor et Ismene/E2 : Anacréon/E3 : Erosine
1771	Les Projets de l'Amour	BH	C.-H. Fusée de Voisenon	J.-J. Cassanéa de Mondonville	A1 : L'Himen et L'Amour/A2 : Jupiter et Calisto/ A3 : Mirzèle, Féerie
1773	Les Mélanges Liriques	BH	F.-A. Paradis de Moncrif	F. Rebel, F. Franceur	Ismène/Zélindor, Roi des Silphes
1773	L'Union de l'Amour et des Arts	BH	P. R. de Monnier	P. F. J. Floquet	E1 : Bathile et Chloé/E2 : Théodore/E3 : La Cour d'Amour ou Les Troubadours

参考文献

書籍

1800 以前

Argenson, René Louis de Voyer d' : « Note sur les œuvres de théâtre », f.283, *Study on Voltaire and the 18th Century*, II, vol. 43, p.530.

Cahusac, Louis de : *La danse ancienne et moderne*, 1754 .

D'Aquin de Château-Lyon, Pierre-Louis : *Siècle littéraire de Louis XV ou Lettre sur les hommes célèbres*, 1754.

Estève, Pierre : *Les Esprits des beaux arts*,1753.

Léris, Antoine : *Dictionnaire portatif historique et littéraire des theatres*, 1763.

Marmontel, Jean-François : « Elemens de littérature », Tome V-X,1787, dans ses *Œuvres complètes de Marmontel*, Nouvelle édition, Tome XII-XV, 1819.

Mercur de France, avril, mai 1736.

Nouvelle à la main en 1733 à 1739.

1800 以降

Barthélemy, Edouard de : *Nouvelle de la Cour et de la ville [...] 1734-1738*. 1879.

Capeille, L'abbé J. : *Dictionnaire de Biographies Roussillonnaises*, 1914.

Ishikawa Yumiko : « L'opéra-ballet, Enfant du siècle des Lumières », *CHOREOLOGICA*, European Association of Dance Historians, n°3, 2000. p.27-45.

Maruyama-Ishikawa, Yumiko : *L'opéra-ballet des Indes Galantes (1735) aux Fêtes d'Hébé (1739)*, Thèse soutenue à l'Université de Paris 4, 1995.

Masson, Paul-Marie : « Le ballet héroïque » , *La revue musicale*, 9e année, no.9, 1er juin 1928, p. 133-154.
Œuvres complètes de Voltaire, Nouvelle édition, Correspondance II (Année 1736-1738., Nos 540-937), 1880.
Perreau, Stéphan : *Joseph Bodin de Boismortier 1689-1755, Un musicien lorrain-catalan à la cour des Lumières*,
Les Presses du Languedoc, Montpellier, 2001.

和文書籍

石川弓子「オペラ・バレ考察 - 17、18 世紀フランス・オペラの 1 ジャンル -」音楽学会発表原稿、1999.

内藤義博『フランス・オペラの美学、音楽と言語の邂逅』、水声社、2017.

丸山弓子「17、18 世紀フランスにおける音楽劇の一断面 - オペラ・バレのプロローグ考察 -」地中海学会『MEDITERRANEUS XIV』、1991 p.25-[48].

Online 資料

Dictionnaire des journalistes : <https://dictionnaire-journalistes.gazettes18e.fr/journaliste/>

Encyclopédie de L'art lyrique français : <https://www.artlyriquefr.fr/index.html>

Gallica, Bibliothèque numérique : <http://gallica.bnf.fr/>

Grove Music Online : <https://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic/>

musicologie.org : <https://www.musicologie.org/Biographies/b.html>

Opéra Baroque : <https://operabaroque.fr>

Wikipedia (en)

Wikipédia (fr)

Wikipedia (jp)

視聴覚資料 (2022 年 3 月現在) C D

Boismortier, Joseph Bodin de, *Les Voyages de l'Amour*, Purcell Choir & Orfeo Orchestra, GCD924009, Glossa, 2020